

『大航海時代の海域アジアと琉球』 正誤表

2023.5.11 版

下記のとおり誤植がございました。お詫びして訂正いたします。

第2刷をお持ちの方は赤字と青字をご参照ください。

第3刷をお持ちの方は青字をご参照ください。

- ・ 9 頁 1 行目：郭序霖『重編使琉球録』→郭汝霖『重編使琉球録』
- ・ 56 頁 7 行目：一五四四年、コルテザンは→一九四四年、コルテザンは
- ・ 57 頁 2 行目：「大航海時代叢書の一冊として刊行した。」末尾の注(7)を、6 行目「その成立過程や描写内容については略述するにとどまる」の末尾に移動。
- ・ 58 頁 5 行目：一五四八年にカリカットに到達し→一四九八年にカリカットに到達し
- ・ 65 頁 16 行目：一五四四年にその英文訳注版を→一九四四年にその英文訳注版を
- ・ 66 頁 13 行目：(百十七葉表～百十八葉裏) → (百十七葉表～百七十八葉裏)
- ・ 150 頁 18 行目：銅、小麦、砂金を持ってきます→銅、小麦、金塊を持ってきます
- ・ 200 頁 10 行目：琉球王国も一五五〇年代から→琉球王国も一四五〇年代から
- ・ 212 頁 3 行目：この一五七五年の交戦事件→この一四七五年の交戦事件
- ・ 215 頁 10 行目：一五七一年の黎朝のチャンパ侵攻→一四七一年の黎朝のチャンパ侵攻
- ・ 222 頁 7 行目：しかし一五四〇年代以降→しかし一四五〇年代以降
- ・ 231 頁 17 行目：銅・明礬・砂金である→銅・明礬・フルセリアである。
- ・ 232 頁 12 行目：明礬・砂金・黄金が挙げられている→明礬・フルセリア・黄金が挙げられている。
- ・ 232 頁 16 行目：「また琉球人は黄金とともに砂金(フルセリア)も輸出していた(22)。この砂金の産地は日本ではなく台湾であろう。」
→「フルセリア (フルセレイラ) とは、銅・鉛・錫などの粗質の合金を指すようである(22)。さらに琉球は日本産の黄金だけではなく、台湾産の砂金も輸出していた可能性がある。」
- ・ 273 頁 16 行目：一五一八年の夏期の南西風で→一五一九年の夏期の南西風で
- ・ 273 頁 17 行目：それと入れかわりに、フェルナン・ペレスの艦隊は
→前年九月には、フェルナン・ペレスの艦隊は
- ・ 296 頁、図 10-1 キャプション：Costro→Castro
- ・ 317 頁 12 行目：ディエップの海図作成者であったスコットランド人ジャン・ロッツが
→ディエップの海図作成者であったジャン・ロッツが
- ・ 317 頁 15 行目：(かっこ内冒頭) canal os→calales
- ・ 323 頁 17 行目：記しており。→記しており、
- ・ 324 頁 19 行目：台湾本島→広東近海の島嶼 (上川島か)

- 343 頁 5-6 行目：彼らの間では中国やレケオス Lequeos を発見することだけを話していたわけではないが、艦隊ではそのつもりだったと語りました。
→彼らの間ではあるいは中国やレケオス Lequeos を発見することだけを話しており、艦隊ではそのことを公にしていました。・345 頁 5 行：台湾海峡とみてまちがいない→広州近海の航路（擔桿水道か）を指すのだろうか
- 345 頁 6 行目：台湾海峡→広州近海
- 409 頁 16 行目：一五八七年七月にマニラを出航し→一五八七年七月にマカオを出航し
- 卷末 13 頁 21 行：Homen→Homem
- 卷末 13 頁 22 行：Homen→Homem
- 卷末 37 頁、図 10-1 キャプション：Costro→Castro
- 卷末 48 頁 28 行：archeological→archaeological
- 卷末 64 頁、注 33：「pp.179-180」の重複を削除
- 卷末 65 頁、注 47：John Huyghen→Jan Huyghen
- 卷末 74 頁、注 7：「同書の底本は、ハクルート協会版所収のポルトガル語原文である。」の後に、「合田昌史「ポスト・モンゴル時代の海洋インテリジェンス——16 世紀前半ポルトガルの地図と海事書をめぐって ——」（『東洋史研究』71 巻 3 号、2012 年）。」挿入。
- 卷末 75 頁、注 16：「合田昌史「ポスト・モンゴル時代の海洋インテリジェンス——16 世紀前半ポルトガルの地図と海事書をめぐって ——」（『東洋史研究』71 巻 3 号、2012 年）」を、「合田前掲「ポスト・モンゴル時代の海洋インテリジェンス」」に変更。
- 卷末 82 頁、注 47：1651（嘉靖 40）年序刊の→1561（嘉靖 40）年序刊の
- 卷末 114 頁、注 22 の文章全体を次のように変更。
「原語は frusseria。『東方諸国記』では、フルセレイラ（fruseleira）などとも記す。生田滋の考証によれば、フルセレイラとはポルトガル語の廃語で、「真鍮の削り屑を集めて作った塊」を意味するスペイン語 frusclera と語源を同じくし、銅・鉛・錫などの粗質の合金を意味するという。ピレス前掲『東方諸国記』207 頁、注(14)。」